



八冊口傳書 下

7 3  
3645  
430





門 73  
號 3645  
卷 430



凡起居動靜之禮業者都而有  
 一 百首條以有勤容周旋之品亦  
 號進納禮所為其教專要頭肩  
 臂指腰足之六節至于其禮業  
 成調而導人則以氣心之二能  
 覺其品節口授之事而行身者  
 自止於恭敬禮節也夫禮則天  
 地之道也人無禮具仁義如何  
 予不可有以不學也爰門人大  
 津宮川之兩弟子請曰雖欲使  
 導初心門第有箇條口傳耳而  
 恨無約傳書願傳書而明惑予  
 亦耻文音不背而辭之雖然兩  
 弟子之懇望不忍破深志竊著  
 進納禮口傳之旨而傳予短戈



於門人嗚呼猶音者臨幽答且  
後人之笑如何乎學者助予心  
秘此書以妄勿他見

寶永四丁仲冬望日

伊藤幸氏記

當流百箇条口傳

一 御禮と上座之事

是より貴人へ御目見仕極也是と獨禮とも  
坐礼よりあし出様ハ両手にて袴を押し  
指の間を茶大指と屈隠し三尺先と舞子  
歩三出下に居る時膝を考へ不畏腰とり小  
居る極にして左膝を畏ると右を畏ると  
右手を右膝の上より左膝を引たる膝と同じ  
通ふ引合左膝と右膝を距中へ引掛へ  
両肘を膝の上へ垂窺ひ居る時名字を呼聲  
と自跪ふ段とけ右を呼聲と借りれば  
指間の廣さハ足首よりとく名字を呼と  
段と下又使者よりとく主人の右を  
座下より調子子とく思し主人の  
座下より調子子とく思し主人の  
座下より調子子とく思し主人の  
座下より調子子とく思し主人の

右の手へ起つた眼を少くも左の手を膝へ  
より右眼と左眼の向へ引出し右手を膝へ  
取右膝を折る膝折して廻りきく又左の手へ  
向ひて右手を右膝へより右眼とより左眼と  
右眼の向へ引拵た手と膝へも右膝を折る  
膝折してより膝へ入り

一 貴人御手自慰斗抱多下頂戴之事

是も其の巨く獨礼とよむ祝第事の位名  
之の内祝慶斗可多下を何らハハ位の内礼  
トとて服一居向半腰より貴人より手乃  
片手安座に於て短刀をとり服差あとも  
ぬら又の手とり居又半腰より方へ向け  
御手早くより一間強手より畏擗右膝へ  
左手を屈右手へより下慰斗と膝長れし  
何れハ右の大指より押へ膝へ退た手の  
と膝し右手に右へ引延慶斗と二ツ折

左手に持右手を仰けた手の向へも膝へ戴  
た手の膝へより折しと右手に右膝を扱出す  
この下慰斗と膝中よりし夫人の首にこ  
懐中ハすつらん着切慶斗と多下の内  
膝へ引へ退た手を首の巨く戴る下居の  
服差垂たる向へ右腰と屈服差を指し後の  
毛次礼又も老へ向御手自慰斗拜領仕給有候  
中と下禮し此膝手ハカ多し又慶斗の口唇  
より多下りも何多し其品更に記す  
めし礼し下直斗ハ君と短柄

一 玄猪餅拜領之事

是ハ多下居にて少礼トと服差さし何れ  
御前へ奉擗右膝へた手を屈右手に膝を  
引へ退る戴きた服の口へ向きあわす  
にて少礼より止す御手あも何れ  
又お既人餅を扱候も有し何れ

主人に向戴すのこ又家により主人の目録を  
録し傳書呼出し一人々あて録一ツ宛主人  
向戴しあて向すし書儀の品宛あてし  
出仕の務めにあてし居るはあてし

一 左目録後度書の中事

常の巨く左目録を右目録より傳書度  
○上輩より信者下輩へ向すは左目録より  
右目録にて左目録と右目録と後度書と折  
り札にては上目録より下目録に伝書度  
向ハ不退居るは信者人信者と言出さすの  
向右と向左と退り書り取取取取取取取  
目録と一層より退り右目録の字記と  
外へ一重具上目録と信者人信者人信者  
左目録と一重具上目録と信者人信者人  
右目録と一重具上目録と信者人信者人  
折紙の字記と一重具上目録と信者人

左右の引分て勝るは是より少すの左目  
録より少す也

中輩へ向すは左目録より右目録にて左目録  
一層に書は上目録より折紙と中目録より  
折紙と折り紙と一重具上目録と信者人  
と信者の信者人信者人信者人信者人  
退り取取取取取取取取取取取取取取  
取取取取取取取取取取取取取取

下輩より信者人信者人信者人信者人  
常の巨く持り取取取取取取取取取取  
より一紙し先左目録にて折紙と信者人  
あてにて折紙の上目録と信者人信者人  
折合取取取取取取取取取取取取取取  
取取取取取取取取取取取取取取取  
居るは取取取取取取取取取取取取取  
信者の信者人信者人信者人信者人



持ておた膝を裏折紙とりぬき左方の目録を過へ  
左手を握りあしに折紙の上へ左方を布造り  
引合垂れ退折紙とせよとた方と申さず  
まゝ早むたさうなうし信納紙に余人も  
左方の側へ出せ膝を裏折紙に折紙を  
押へ右手にて左方の柄とより右腕のまをま  
のたへ引直し右手にて左方を元止したまへ  
折紙をぬきしきと真の納紙しして信納紙を  
小笠原大膳長時の信也長時信のあつた  
信の信と聞今その所迄は右目録を前へ  
くま折紙退折紙又まなた左側と  
と方折紙とあつて持出た右目録とあつ  
てくま折紙退折紙を控成の度にてハ礼不  
中して下座へたつたつてまゝにハ礼  
中折紙とつてしきと上を敬むる礼なりをハ  
小笠原播磨守元長の教也元止ハ長時より

道は前の人へ時代によりは礼節の品改む  
る事もあつし

まなた膝右端よりハ右目録と持出たあつ  
てくま折紙退折紙を右の向の端より下座  
にて貴人を後よせぬやうに居早し先左膝とつて  
右膝右手にてぬた膝左手と引折紙と右の向へ  
入なり是は左方より折紙と上座の品と又たの向  
よりあつたり右目録とあつてくま折紙退折紙  
たけ言へ向ゆればはてえ右膝とあつた膝  
左手と引右膝と引合折紙とたの向へ  
まゝとまなたのた右端よりあつてハ折紙  
替へ能く折紙あつし

同右目録を貴人出ゆる細指の長分の  
信の各あつたり右目録より三三人あつた  
摺おたまゝとあつた右手にて左方の折紙と  
まなたの向へ出せしめ摺おた折紙と

あまたの指と君と折衷のしりたをう  
引分ちしたつも指さし膝の板を折た右海  
品何まつしきくは是播則の教あり

一 他人持来たる目録取扱後

是は他のあま主人たる目録を此紙に  
又朋友より目録を此紙に或は左折紙と書  
正しく折紙の折りたる膝と変右膝と  
突極りたり目録とつ下に能多主眼板  
此紙の人目録を成年調を見今名号と申  
そんどもり恒産と上言ハ主人のあま  
ト上言をその扱後等の納と上他  
あまの折りたる人此折紙と申の内ハ  
目録を引取り

一 折衷の指と君と折衷のしりたをう

折衷の指と君と折衷のしりたをう  
主人客知の折りたる主人の内多  
上折紙

折衷の指と君と折衷のしりたをう  
又買入算入折りたる一門  
目録と書さる由一折  
官名不同なる折りたる  
君の折りたる人折りたる  
折りたる主人折りたる  
とのくは折衷の折りたる  
折りたる主人折りたる  
此折りたる折りたる  
折りたる主人折りたる

一 納板三匠之事

折衷の指と君と折衷のしりたをう  
折りたる主人折りたる  
折りたる主人折りたる  
折りたる主人折りたる  
折りたる主人折りたる  
折りたる主人折りたる  
折りたる主人折りたる  
折りたる主人折りたる



主人の記載に存字目録を添のちおはせしめ  
らるる君もしてた方お桶とより折紙を合  
折紙も折せしけり寄た方とあるにてこれに  
折紙を折せしめ寄退る記載以後折紙  
のちお桶も折せしめ折紙も折せしめ  
おくきた方と折紙も折せしめ

一 伊太子の書影のちお桶の書影

他より来る太刀目録と伊太子の書影の時  
おのちお桶の書影の時お桶の書影の時  
おのちお桶の書影の時お桶の書影の時  
おのちお桶の書影の時お桶の書影の時  
おのちお桶の書影の時お桶の書影の時  
おのちお桶の書影の時お桶の書影の時  
おのちお桶の書影の時お桶の書影の時

一 太刀二腰の書影の事

おのちお桶の書影の時お桶の書影の時  
おのちお桶の書影の時お桶の書影の時  
おのちお桶の書影の時お桶の書影の時  
おのちお桶の書影の時お桶の書影の時  
おのちお桶の書影の時お桶の書影の時  
おのちお桶の書影の時お桶の書影の時  
おのちお桶の書影の時お桶の書影の時

是の書影の書影の時お桶の書影の時  
おのちお桶の書影の時お桶の書影の時  
おのちお桶の書影の時お桶の書影の時  
おのちお桶の書影の時お桶の書影の時  
おのちお桶の書影の時お桶の書影の時  
おのちお桶の書影の時お桶の書影の時  
おのちお桶の書影の時お桶の書影の時



使者番の巨くお座すところいふと中袖居く  
来るその常徳もつし折紙ハ小袖を乞へ出し  
折紙目録を折紙居りし根馬代方折紙  
にとりし折紙目録馬代方折紙申と目録  
を廣げ分れし折紙居りし馬代方折紙申  
其を折紙の折紙目録を折紙居りし  
中と折紙申余人折紙申折紙居りし目  
録折紙居りし折紙申折紙居りし  
折紙居りし折紙申折紙居りし

一 左分別儀馬別券と事

太刀別券としは眞の太刀にて事馬代方  
は折紙目録を常の巨く右折紙申  
折紙居りし目録を事の巨く右折紙申  
と事折紙申折紙居りし折紙申折紙居りし  
折紙居りし折紙申折紙居りし折紙居りし  
折紙居りし折紙申折紙居りし折紙居りし  
折紙居りし折紙申折紙居りし折紙居りし  
折紙居りし折紙申折紙居りし折紙居りし

是書號の折紙居りし折紙申折紙居りし  
折紙居りし折紙申折紙居りし折紙居りし  
折紙居りし折紙申折紙居りし折紙居りし  
折紙居りし折紙申折紙居りし折紙居りし  
折紙居りし折紙申折紙居りし折紙居りし  
折紙居りし折紙申折紙居りし折紙居りし  
折紙居りし折紙申折紙居りし折紙居りし

馬別券としは眞の太刀にて事馬代方  
は折紙目録を常の巨く右折紙申  
折紙居りし目録を事の巨く右折紙申  
と事折紙申折紙居りし折紙申折紙居りし  
折紙居りし折紙申折紙居りし折紙居りし  
折紙居りし折紙申折紙居りし折紙居りし  
折紙居りし折紙申折紙居りし折紙居りし  
折紙居りし折紙申折紙居りし折紙居りし  
折紙居りし折紙申折紙居りし折紙居りし  
折紙居りし折紙申折紙居りし折紙居りし

振後藩有りこま播州元長の傳承之太刀も真一白  
生馬の竹之常の法を傳承す

一 庵之太刀徳政傳事付風吹太刀

是は付一割他の大右にても入鞘すて鎮日多武野  
皇休藤原へ使者出向い常の徳政傳へ使者  
途中少御待久け居り釘番番の元次使者の居ら  
ば一は行ては上と聞か言法の満柳を好む途中の  
賑ひを常目録を本太刀口と云うて太刀折紙  
おの上取直りて重徳へ送し徳政人云ふ一云ふ  
も若少御云々太刀折紙中下取直り重徳自他  
風吹中付の折紙の上お太刀の柄と云ふ是は風吹  
の太刀と云ふ雨降中へ庵も悪らまは中少御  
徳政も代めい途中にて徳政伝す付ハ面陰太  
申す徳政傳傳つし常の院向り振後藩的傳承と  
他より来る太刀と徳政の御意も風吹傳承らる  
折紙と云ふ指す押へ太刀と片と云ふ

徳と折紙の上お云ふ御也々常の巨く取り又  
主人鞠言の竹他より来る太刀と振後藩の竹  
常の巨く指出下西取折紙と太刀折紙伝承と  
實口と中と西取常徳傳承へ引かまは是は庵の  
太刀取り又常徳主人他へ西取折紙傳承時  
御供と竹の御意の常目録と云ふ御切り度  
わりの上お傳りし庵の太刀と云ふ元次徳政  
おの事へ主振後藩申云う代り徳政好む徳政  
と云ふ又西取傳承

一 太刀口銀付徳政傳事付刀解事

太刀口太刀口太刀口太刀口と云ふ徳と付柄と  
小庵一文字中へ降緒長く表刺裏刺多と  
太刀口と云ふ代と是と徳とと世に云り徳傳  
常のと云ふ太刀と云ふ御切り太刀有り一云  
太刀口先の太刀口太刀口太刀口と云ふはと云  
又太刀と云ふれ上取直り太刀太刀は





はしつゝ使者を分ち折れしはしつゝ上りて主人  
の居る小舎の中へ代り主人は是れ已む事候  
お折れしはしつゝ上りて使者は鳥帽子  
を御袴の心細ハ長袴也

一 七日、扇子渡事

是の古伝組おとし馬を懸し令お包を扇子と  
言たりは鷹やうを言のこしく持扇子を令の  
内の中を立ち指さる押へ持りお言へ並ハ並  
はしつゝおち扇子を二言おたりお膝お載り  
指さる先を令の扇を令の扇を令の扇を  
おち扇子を令の扇を令の扇を令の扇を  
たのハ扇の似へけおち扇子を令の扇を  
後を令の扇を令の扇を令の扇を令の扇を  
おち扇子を令の扇を令の扇を令の扇を  
少し退るを令の扇を令の扇を令の扇を  
おち扇子を令の扇を令の扇を令の扇を

七日に扇子を令の主人へ自分お礼へ上りて  
おち扇子を令の扇子を令の扇子を令の扇を  
上りてししは扇子を令の扇子を令の扇を  
おの上へ入るを令の扇子を令の扇を令の扇を  
扇の中へ入るを令の扇子を令の扇を令の扇を  
令の扇子を令の扇子を令の扇子を令の扇を  
扇の中へ入るを令の扇子を令の扇を令の扇を  
扇の中へ入るを令の扇子を令の扇を令の扇を  
扇の中へ入るを令の扇子を令の扇を令の扇を  
扇の中へ入るを令の扇子を令の扇を令の扇を

一 七日、軍扇渡事、付軍扇計

七日に右軍扇を令の扇子を令の扇子を令の扇を  
しは扇子を令の扇子を令の扇子を令の扇を  
令の扇子を令の扇子を令の扇子を令の扇を  
扇の中へ入るを令の扇子を令の扇を令の扇を  
扇の中へ入るを令の扇子を令の扇を令の扇を  
扇の中へ入るを令の扇子を令の扇を令の扇を  
扇の中へ入るを令の扇子を令の扇を令の扇を  
扇の中へ入るを令の扇子を令の扇を令の扇を  
扇の中へ入るを令の扇子を令の扇を令の扇を







手に向のり度へゆきゆつし。口書状斗を  
酒す時の極快状を君手抄りては  
状と九つ接し角を接し状と右手あり角の  
上より口より右手に九つ接し右手  
と接し酒すは後元右へ垂り角の上より  
主人の右よりして垂り又九つ接  
つれより手も状の懐中より右手あり  
是ハ角の上より口より封状の懐中して是を  
角を接し状を口より口より状より口より  
よりし極快向手若主人は前より手も口より  
阿らハ其より裁量と如く腕より上より  
より手より口より手より右手若目と  
足合も角を接し右の手より垂りては  
膝へ戻し極快の手掛あり手より出  
あり手より口より手より口より手より  
のせハ手も膝へ戻り手より手より手より

手に向のり度へゆきゆつし。口書状斗を  
酒す時の極快状を君手抄りては  
状と九つ接し角を接し状と右手あり角の  
上より口より右手に九つ接し右手  
と接し酒すは後元右へ垂り角の上より  
主人の右よりして垂り又九つ接  
つれより手も状の懐中より右手あり  
是ハ角の上より口より封状の懐中して是を  
角を接し状を口より口より状より口より  
よりし極快向手若主人は前より手も口より  
阿らハ其より裁量と如く腕より上より  
より手より口より手より右手若目と  
足合も角を接し右の手より垂りては  
膝へ戻し極快の手掛あり手より出  
あり手より口より手より口より手より  
のせハ手も膝へ戻り手より手より手より

當流百箇條口傳 第二

一 太刀折紙の目録後元事

太刀馬の向へ魚を指すと其法ありゆ







物者より扇をのり口と申腰巻をとり  
引伸腰巻を右手にし、腰巻を左手にし腰巻を  
と扇柄をこけ右を指し一孔しきつし指巻は  
物手の也持出腰口より物手散り指巻は  
腰巻の先をさるゝのたつし紙は右側のきつし  
腰巻をさるゝのたつし持出さるゝと仰  
ゆらハ戴たうり脚指物手をつし又物手散  
手物手散ハ右を柄手を左手ハ腰巻を引伸  
指出下は扇を左を指出下は腰巻を右を  
指口と申きつし仰ゆらハ脚指物手をつし  
差とりした腰巻の先をさるゝし

一 太刀に軍配圓徳後腰の付圓斗

腰中の軍配圓徳の再障ありし指巻ハ左を  
下ハ腰口より圓斗を脚指物手をつし差とり  
と細き指巻を腰巻より右にこ柄指物手  
左手を仰け圓斗の先を指巻にこれと力ハ

足合く腰巻を納め指巻ハ左を指巻は  
こつと圓斗を指巻に力ハ左を指巻ハ  
と曲を力ハ左を圓斗ハ指巻に指巻は  
圓斗を力ハ左ハ腰巻をさるゝこれより引伸物手  
さるゝと再障と目あり

一 太刀に鞭、腰巻、付圓斗

是も銀柄太刀を右を第を左の中指巻は  
風帯の半を指巻に力ハ左を第をさるゝ  
元指巻ハ加指巻はさるゝ腰巻ハ指巻は向し  
たりこれハ小指巻にさるゝ加指巻はさるゝ第ハ  
さるゝとさるゝ腰巻ハ指巻ハ二層あり  
先左方を指巻に力ハ右をさるゝの鞭は  
指巻し腰巻ハ指巻はさるゝはさるゝとさ  
一孔し力ハさるゝ指巻はさるゝ持出力ハ  
さるゝとさるゝ鞭はさるゝ物手よりさるゝ  
口よりさるゝとさるゝ脚指物手ハ指巻は







右勝手に摺出方は甲合の方に在り  
 少折上垂る口より網を摺出先尾  
 明け諸を右と右手と見わけ右勝手  
 一々多と左一重を折紙と両手物右  
 より穿退し折紙と方物を右と見  
 磨の多と押出しハ籠子の事と人  
 かくも可化回りの時

一 鷹の雁鴨二三語附事 付竹掛の事

鳥一々の竹を右に竹掛と凡に之を網を  
 人に向物り差度し右と左の手一網を  
 上しと口より右手にて竹掛とや  
 身通ておしるの口に左手を厚く  
 右手は竹掛をより左手を差さる  
 持止し網手を後者へ向右手折れし  
 にく右の手一重も網手を上しし  
 折るハ右手折れた手を向う厚く網手を

上しと左手を厚く上しし網掛折紙と  
 右手を凡の厚き上葉より折るハ二重折  
 哉折紙のなり重に多しハ折紙也  
 網手を上し凡を裁ち取り又右二ハ竹を割  
 け諸を竹をへ使繩にて結成ハ重折  
 磨の多ハ多しなり二尺半の竹一物と  
 一陰を厚く右手を竹を挿たる竹と  
 凡の手を折り差した手を右の多に  
 右の手一重に竹一極の重く右の手一  
 竹を挿たる出した方れ多く左手と厚  
 陰を人の右手にて竹を上より厚く  
 一竹一重して重く折紙ハ竹を厚  
 口に厚くおし網手を上しと重く  
 二の重と押あしと一退口より一  
 右手よりより竹と凡の重を重く  
 一竹を折るハ二尺半の竹一物と



たりてつれしちをさうさく扱後あふふ  
持出先ちをとりて韃の鹿を右より物御  
とたふれはるる者扱ふを口よりしはる韃の  
美富まへれたるさく納柳に扱あたる  
脚を右より鹿をさく韃をたふたふを  
さう上よりほりてあふとく物りやを右より  
韃をさふはるる者よりさく一並へは口より  
先韃をたふさくさくあふとくほりて  
後美富はあふとくほりて又上よりさく  
言をさくけりてはるる韃もほりて言をさく  
あふ美富はあふの鹿を納柳を韃をたふ  
扱出韃をたふ物先をさくさくさく太刀を  
あふさくさく扱あふ右膝よりあ退し韃をさの  
とくは腰草をさくはるるあふのさくはる  
はさく納を韃をさくあ退したふ美富をさく  
あふ退したふ韃をさくさくさくさくさく

さの扱後あふの納をさくさく。口韃をさくさくに  
腰草をたふにさく美富を扱へ持出さくはるる  
ほりてさく韃をたふさくほりて右より口より  
さくさく美富をさくさくほりて右より腰草を  
さくたにて鹿をさく右よりさくさくほりて持出さく  
扱あふあふにて持出口より美富を納たふ  
ほりてほりて使者ほりてさく韃をたふさくほりて  
美富をさくさくさくさくほりてさくほりてさく  
納柳扱あふにさく腰草のさく右よりさく美富を  
扱あふさくほりてさくはるるさく人あふさく  
物扱ほりたふほりてほりてほりてさく  
ほりてあふとくほりてさくほりて腰草をさく  
たふにて鹿を美富をさくほりて扱へたふ  
さくさく總一この武家扱あふさくさくはるる  
射向をさくさくほりてほりてほりてほりてほり  
つてはるるほりてほりてほりてほりてほりてほり







吾等のよく居すものし。口證中居すもの  
あふは右先を振り一息とに右へ並へ直に上  
りあふはて前あし前あしく押出し皆込と  
人此方し居すは後方人あふはて右先を  
より左へ引くつれしあふはては後方  
あ持あし鳩胸を掛は自ら居押出し  
皆込とを自少押出し酌量り皆込とを  
思しあふはては

一 太刀は目録に渡す事付扱はあふ人太刀

是を折紙しくあふ目録に居す太刀と  
右あは目録に右手の中指を右振り指さし  
けけあは右の振り目録を左へあし  
後より前へあし作けはあしを  
にて居す目録の中へ入るは居す太刀  
あふはてはあしを居すは居す  
あふはては居す居すは居す

居あはては居す太刀を作け居すは居す  
あはては三指つれし三指目録を左へ  
元より扱は居すあしを居す目録を右へ  
あしを作け居す太刀を居すは居す目録の上  
居すは目録二つの中へ入るは居すは居す  
あはては太刀とより居すは居すその後  
あふはては居すは居す人内居すは居す  
あふはては居すは居すのあし扱は居す  
あしは納柳居すは居すのあしは居す  
あふはては居すは居すは居すは居す人  
向け居すは居す

一 目録に居す居す付事居す事

右手に封の言と向つし持切に居すは居す  
あふはては居すは居すは居すは居す  
あし封の言と人一向に居すは居すは居す  
あしを居すは居すは居すは居すは居す

封の方と使者に向つて礼してさなり扱はれ右も左  
 たるを指拵出候ふ正しく封の面は折紙  
 には平しく折紙の拵出右も左も多目と折上  
 たるを指拵してさなり扱はれ折紙の面は折紙  
 たるを指拵してさなり扱はれ折紙の面は折紙  
 たるを指拵してさなり扱はれ折紙の面は折紙

一 多目と折紙の拵出他人多目折紙拵出

多目と折紙の拵出他人多目折紙拵出  
 多目と折紙の拵出他人多目折紙拵出  
 多目と折紙の拵出他人多目折紙拵出

多目と折紙の拵出他人多目折紙拵出  
 多目と折紙の拵出他人多目折紙拵出

一 多目と折紙の拵出他人多目折紙拵出

多目と折紙の拵出他人多目折紙拵出  
 多目と折紙の拵出他人多目折紙拵出  
 多目と折紙の拵出他人多目折紙拵出









播別元長の信を御陣馬陣より入部令  
所巨く扱務申心な方希と頼一揃り  
一入部方治元版付扱務事

左方後左腕の事の巨く扱務ハ由申申物出  
折紙より言た事と令此柄一付申物  
此引を言申たの扱務ハ言申り  
言申め折紙事ハ言申物申の付  
降四一申物言申物申の扱務ハ  
幕りの由申物申事の扱務ハ  
納扱扱出方と申物申物申後  
折紙と申物申物申物申物申  
申物申物申の其四を治り申物申物申  
一遺物方折紙後左腕事付刀扱務  
左方と申物申入申物申の右の事申物申  
此の事の巨く言申物申物申物申の付  
信申物申物申物申物申物申

袋入申物申元版扱務ハ物申り代ハ言  
申物申稀なり申一奇ハ刀扱務ハ是申袋入  
封申付箱一載て候申目録申是申物申  
は申目録方の折紙申を治し選物申物申  
申物申人れ申物申申物申申物申申  
申物申一申物申申物申申物申申物申  
申物申の遺物ハ言申又申申入袋申物申  
申物申申物申の扱務申物申一扱務申物申  
申物申申物申申物申申物申申物申申物申  
申物申申物申のれ折紙扱務申物申申物申申物申  
納申申物申申物申申物申申物申申物申  
申物申申物申申物申申物申申物申申物申

一香菓鳥目申時治元版扱務事  
多目の封付付た事申物申一扱務申物申申物申  
申物申申物申申物申申物申申物申申物申  
申物申申物申申物申申物申申物申申物申





して右腕に袖をたて着て思しぬたしを何れ  
仰げて御腰飾ふとさうりふこれ中へ御腰飾を  
掛つ目し事には主人の御腰飾を御腰に入たる  
さめいさうおりの管へ不入り御腰飾の腰へ  
散り草を御腰の大指ちて押へ御腰飾のさうり  
ぬやうに御腰飾を主人の右へおしし上りし又  
大親と上りぬ御腰飾を御腰の御腰飾を主人へ  
向御腰飾の上りし是ハ大親の御腰飾の御腰飾  
を御腰飾の御腰飾の御腰飾の御腰飾の御腰飾  
を御腰飾の御腰飾の御腰飾の御腰飾の御腰飾  
を御腰飾の御腰飾の御腰飾の御腰飾の御腰飾

一 笛尺八等語を渡事

袋入の侍者の上より仰り右の御腰飾は  
トたぬ御腰飾を御腰飾の御腰飾の御腰飾  
本へ御腰飾の御腰飾の御腰飾の御腰飾の御腰飾  
御腰飾の御腰飾の御腰飾の御腰飾の御腰飾

御腰飾の御腰飾の御腰飾の御腰飾の御腰飾  
一礼し之を御腰飾の御腰飾の御腰飾の御腰飾  
主人へ上りぬ御腰飾の御腰飾の御腰飾の御腰飾  
を御腰飾の御腰飾の御腰飾の御腰飾の御腰飾  
風を御腰飾の御腰飾の御腰飾の御腰飾の御腰飾  
上りぬ御腰飾の御腰飾の御腰飾の御腰飾の御腰飾  
他人へ御腰飾の御腰飾の御腰飾の御腰飾の御腰飾  
御腰飾の御腰飾の御腰飾の御腰飾の御腰飾

一 木葉之花語を渡事

古法ハ昔の御腰飾の御腰飾の御腰飾の御腰飾  
の花を紙にて包本とみりし御腰飾の御腰飾  
御腰飾の御腰飾の御腰飾の御腰飾の御腰飾  
御腰飾の御腰飾の御腰飾の御腰飾の御腰飾  
御腰飾の御腰飾の御腰飾の御腰飾の御腰飾  
御腰飾の御腰飾の御腰飾の御腰飾の御腰飾  
御腰飾の御腰飾の御腰飾の御腰飾の御腰飾  
御腰飾の御腰飾の御腰飾の御腰飾の御腰飾







其後腰通しを以て草を括りて尻尾に  
夜居りしより細掛の如し

一 鞭渡す上中下之事

夫人一鞭上る時、若し子鞭杖を括らば  
の中へ入りしを以て之を以て鼻の上へ  
敬ひて之を以て同輩の鞭の中を若し子  
しりて括らば、後より下軍へ入るる鼻  
を以て之を以て鼻につけて、後より何  
も後を  
腰りしより如し

一 餅袋渡す事

其の餅袋の腰へつけし餅袋を以て括り  
是れを以て入るる時、若し子鞭杖を括ら  
ば、後より下軍へ入るる鼻を以て之を  
草に括りて之を以て同輩の鞭の中を若  
しりて括らば、後より下軍へ入るる鼻  
を以て之を以て鼻につけて、後より何  
も後を  
腰りしより如し

鞭を渡ししより、其の餅袋を括りて、  
後より下軍へ入るる鼻を以て之を  
草に括りて之を以て同輩の鞭の中を若  
しりて括らば、後より下軍へ入るる鼻  
を以て之を以て鼻につけて、後より何  
も後を  
腰りしより如し

一 鞠渡す事

まり、鞠を以て括りて、若し子鞭杖を括ら  
ば、後より下軍へ入るる鼻を以て之を  
草に括りて之を以て同輩の鞭の中を若  
しりて括らば、後より下軍へ入るる鼻  
を以て之を以て鼻につけて、後より何  
も後を  
腰りしより如し

一 張弓の事

若し子鞭杖を括らば、後より下軍へ入るる鼻  
を以て之を以て鼻につけて、後より何  
も後を  
腰りしより如し







よりぬぬにちよりも喜らむつし此時いたし  
小葉を扱者手にてさし口をえん半人へ  
ほすにいさみほすつし

一 鎧披露付人の事

具足の時袖斗と唐櫃の蓋を併け胴建  
の蓋袖斗付甲をのぞき端を骨一かりに  
着けてあまに結し三つおとし甲胴袖斗  
類當り佩楯脇當り持出ぬ人あまに  
あし小唐櫃ハ腰よりあしおとし扱出ぬ二人  
しし持出ると射向の方を解へ上り右を解  
あまに下りあまに二人もにあまに併け書  
持左を解人ハ後退すあまに書出ると右を  
解人ハ押あしおあまにのあまに西面ハ胸板  
と向右と解人ハ左面ハ退れと解人あしお  
射向とあし右袖の方をあまに併け後ハ  
あまに併けあまにあまに併けあまに併け

嫌しあまに人あまに具足きた人あまに  
あまに射向の方を向ると射者人射向の卦算  
とあまに併けあまに併けあまに併け射向の神  
とあまに併けあまに併けあまに併けあまに併け  
あまに併けあまに併けあまに併けあまに併け

一 甲披露付拜領の事

箱のあまにのぞき肩間あまにのぞきあまに  
向あまに併け持出下りあまに併けあまに併け  
あまに併けあまに併けあまに併けあまに併け  
あまに併けあまに併けあまに併けあまに併け  
あまに併けあまに併けあまに併けあまに併け  
あまに併けあまに併けあまに併けあまに併け  
あまに併けあまに併けあまに併けあまに併け  
あまに併けあまに併けあまに併けあまに併け

一 禮と太刀廻付人の事







古来多し以時も氣方を引てある人ハ  
その習字のあか又ハ番下々年ハ一  
右より左し馬より腹の内より出し四面  
見を次ハ字方なりとせり。推為を也  
市中時算算一ツ礼し腹より綱の曲りを  
右の人習つ後す強きて戴き習字の  
官位よりよるし

一 馬拜領二品より

國を持多し馬眼より馬拜領と仰自  
る事亦宛ハその時ハ内舎人より引て  
後人強き上より馬の洗滌等ハ内  
舎人ハ正し此の言後人引出テ圓形に  
あかつ馬よりあかいた手は引て強き  
綱より右を左より綱の左を右より  
三圓ハ出テ戴きその馬を引る人ハ馬  
を強きより引てその馬より綱を右

引て強き人より引て強き人ハ  
引て強き馬より引て強き人ハ  
引て強き馬より引て強き人ハ

一 使者ハ所意より下強候付使者より物より

貴人ハ所意より下強候付使者より物より  
三献使者より強者と振向し強きより  
より又ハ強き吸物の上ハ強きより  
あり又ハ吸物中にて強きより有候者ハ  
直り強き我より強き物より強きより  
強き我より強き物より強きより  
實上強き人ハ所意より強き見合し強き  
三献ハ一番より強き通ひ強き強き  
強き強き強き強き強き強き強き強き  
右の強き強き強き強き強き強き強き  
三強き強き強き強き強き強き強き  
是より強き強き強き強き強き強き





所接後終腰をさしあしりあ物の初め  
脇を屈差そのし品余く口傳惣として  
先人の所を臨りし速水飯吸魚尾と  
古実何りとも至敬不すし品身所所  
なり

當流百々条口傳 第四

一 使者の所並臨中扱者より事

使者二献目と飲時使者の人初より家  
又い月人二主刀刀入る服をちりあ物出  
右服不扱さ小虎を旁ゆ急を述りとも使者  
さきと下あ急を旁へ居向仰急を禮言  
さき後より人た手と右あ下し居あし扱  
這と使者扱より右と下り鞘へ掛た手と  
鞘へ上よりけ柄とあつたつあさり扱

刀の中積と約合能た手あ扱右手を摺あわ  
と仰け扱た手にて降諸をさきけ貴人へ  
向禮て載右手にて鞘中をさうた手に降端  
と扱て扱けへ入扱扱たる短刀とあさ  
臨りたる刀と差誼臨たる身を出以礼中へ  
是と二言の所礼とさき若夫人所扱扱  
若夫より礼初進にて仰急も何りいふ急  
伊礼中扱影へ入刀とあさねり以急の短刀と  
指急本へ出三献めと仰短刀の上へ刀ハ  
差ぬとの身外服を斗扱たる刀降急の  
何ああれとく戴あけし服さしの上へ誼  
の刀とさして出た二言の所礼中とみ  
刀とあさ急中へ出三へん目臨り  
服急中より下何り持出急中へ後急中へ  
是も服差を取急し柄を左つした急あ物  
右手を扱出急中より仰け扱戴急中

右手にて鞘を上より持たせを右に下へ  
つめ持てお影に短刀とぬら、洋領のつめ持  
と指出す方の少く、服差を指すのつめ持  
短刀と指す中へ出さぬ目と指すの自分服差  
斗指すの服差を指すの自分服差を指す  
洋領の服差を指すの自分服差を指す  
刀又服差ハ他人に代へ入折紙お色紙の中  
へ入使者の家へ入折紙

一 刀服差大小洋領の事

是ハ刀又と申す下小意その上ハ服差  
も又方を取らうつし刀に上り置るを右に指  
口の中へ指すを右に指すを服差の柄は洋領  
にハ洋領ハ他人に代へ入折紙お色紙の中  
へ入使者の家へ入折紙

右手にてハ指持を影に短刀と先ハ服差と  
白ありは短刀と先ハ服差と柄ハ  
下より指すを短刀と先ハ服差の柄は洋領  
と指す二方の少く、服差を指すのつめ持  
次ハ服差と指す中へ出さぬ目と指すの自分服差  
を指すの自分服差を指すの自分服差を指す  
を指すの自分服差を指すの自分服差を指す

一 盃の上より折紙の事

刀服差ハ指持の影に短刀と先ハ服差と柄ハ  
右に指すのつめ持に指すのつめ持を右に下へ  
二献の香所へ指す右の香所を右に下へ  
祝儀進に右方目録を入り由らぬ使者を  
指すのつめ持を指すのつめ持を指すのつめ持  
指すのつめ持を指すのつめ持を指すのつめ持  
指すのつめ持を指すのつめ持を指すのつめ持  
指すのつめ持を指すのつめ持を指すのつめ持

斯うたす折段ハ余人引出之書にも書振  
目録ハ徳政事ハ粗多シ左方ヲ左  
右ハ使者所記を細かくする

一 目録拜領之事

換目録下下を邦の負振と徳目録下下  
載又此下と又目録下下は物出下下  
小上中下有し是も所査の圖下下  
右の目録右右左を伸意と  
左下し下下使事ハ所意と  
換目録下下に批下下も  
是れ右目録下下人  
換目録下下は左下  
左下目録下下は左下  
換目録下下は左下  
換目録下下は左下  
換目録下下は左下  
換目録下下は左下

任ハ退者下下は左下  
換目録下下は左下  
換目録下下は左下  
換目録下下は左下  
換目録下下は左下  
換目録下下は左下  
換目録下下は左下  
換目録下下は左下  
換目録下下は左下  
換目録下下は左下  
換目録下下は左下  
換目録下下は左下  
換目録下下は左下  
換目録下下は左下  
換目録下下は左下

一 小袖羽織等拜領之事

左積の時股ハ余人  
御意下下  
時益下下  
戴者人ハ向中  
是出下下  
前ハ小袖

右の手を廣く振りしけり  
所帯を右の手を仰け戴き  
廣く振りしけり  
余り引く使者  
此の時も戴き  
幣は使者も  
上る所  
しその分なり

一 使者、長刀引出ぬる事

是ハ古法然り  
右腕を引つて  
右膝をつら  
とこし  
のりり

握り  
左の手を  
右の手を  
左の手を  
右の手を  
下より

一 馳弓使者の事

是ハ古来の  
左の手を  
右の手を  
左の手を  
右の手を  
下より

手下(三)五次(一)並に本陣(一)あり  
三 敵目とありくさる八小笠原治部大輔政長の  
息女武田甲斐守(入鹿)の別政より武勇  
の由あるある左役人(弓)を執り出たる  
左例あり古法(智)引おれし亦おれし  
と出したる事あり(一)あり

一 他人の弓見事

人の弓をえりし未強をたつし内竹をよしし  
初に矢指置の如きも手にて下より持てて  
夫より未強の弓(手)を持送り内竹の箭と  
見頼木(近)見頼外竹の箭を強形(肩)の  
切柄(お)見頼(手)を物送り外竹の七箭  
本強の肩までえり内竹の(中)強(より)  
扱下と見頼(弓)を(手)に(手)をえりし  
是他人の弓見頼の法(白木)等(手)より  
回事(手)矢指置の如き(初)目(と)なる事

この所の分より村する事あり

一人之矢見お之事

的矢(甲)矢より(先)に射付(箭)より(初)  
篋中の箭(箭)指置(羽)中(箭)指置(矢)より  
又(乙)矢も(右)の(左)く(右)の(左)く(右)の(左)く  
凡(お)の(と)より(大)成(を)解(き)暮(目)神(目)  
類(も)す(げ)箭(より)伝(る)羽(の)方(へ)見(る)根(矢)の  
追(取)の(箭)より(羽)の(方)へ(見)る(的)矢(の)射(付)の  
箭(の)上(の)暮(目)四(目)神(頭)の(如)き(矢)を(手)に(持)て(根)矢  
あり(は)げ(箭)より(手)あり

一 長刀徳元流事

右(手)に柄(中)を(持)及(言)を(執)り(た)つ(た)手(を)柄(へ)  
下(より)掛(切)先(を)垂(り)下(より)上(より)お(け)り(度)あり  
より(右)に(た)つ(た)掛(垂)し(は)時(の)不(可)あり(左)  
垂(に)お(け)た(る)候(き)た(手)を(右)腕(へ)届(た)し  
お(け)り(た)は(る)柄(中)を(持)右(腕)を(右)腕(へ)届(た)し



立掛りしむりし扱は申右寄りたる  
とも後す時ハ龜角おもにさ右寄り  
左手にて柄を抱へ又と上つし扱たし  
徳元中し摺寄右手を下より掛左手に上  
より右寄りの上をより右三掛を一新し左  
立掛り時ハ左手し物登をさく扱す時ハ我  
と居て長刀の柄を右手上に左手を  
下にかきぬ柄中した者の手をよりし  
右寄りをさしめあがり膝をさし又手を  
内に向し切先をさす上を扱した  
右手の下し膝をさし入り

一長刀摺寄四返之事

右手に柄中を扱たるを居右膝をさ股  
をさし又手をさしし長刀の先をさし付  
左膝と左手を空口より使者をさし  
直り左手を長刀の居務りし入し使者を

徳元中し御前し物行時左手を仰け柄中を  
扱右手をさし何けし持り左膝と右寄りを  
下し又右手にて長刀の扱は又と我手し  
右膝寄りの下下をさし押出し使者を  
さすは天井より座をよりし御前し  
さし右の正くを刀を扱思ひさし  
徳元中のさしある時一もの扱を  
天井より座をよりし御前し  
我手と居て長刀をさしに  
扱と左手と柄中と扱右手を鞘の  
右後御前し扱りあの正くを  
入天井より座をよりし御前し  
左手より御前し御前し長刀を  
さし何けし時ハ左手と右膝を  
右膝より御前し長刀を我手し  
左手と空口より使者をさす時ハ

阿け幕の正しく物仲前へ進んではさきへ  
少度あはて主人と間のをりや一の正しく  
物おに中使者信するやたみ了鞘口をた  
りし物石室のきをよつし引寄たはて柄中  
とより右手にて鞘口をとり又をり後へ  
石室を美人お右へ移し物違ふをり  
手印の振る能く能く振舞まつし業より信  
者より趣いさるるははくあ付後を海綿より  
常くまへにけ行あへ物出掛目お石室のきを  
仰あへし又れきを後へし持出あたうあし  
と之威先を常くあ中重く

一同納懐二品之事

鞘のきへ前掛こきた膝へたををつり右膝を  
ま右にたて鞘の下に帽子のき内着をよ上より  
手と手少し引出し又右をよ下より掛と力  
へ物鉄たをよつし右手にて柄中をとり金よく

持たを右手に上へ下より掛石室後へしたは  
きへ物多きたへ歸ぬとまへなはきへ物あし  
此時柄中へ切た膝へたをよつし右手にて  
上より柄と能く引出し右をよ下よりかけたま  
と上より手と力を右へかきたを右に上へし  
て石室を後へし右へ物とのくお行ああり

一 庭より信を渡す事

将場陣中にて後日お右手に物出たをよ  
下に端長刀をよ又きを我うたへし持たをよ  
変て口上と力をたをよ移した手にて石室を  
抱へ又をよつし信すく信を右へたをよと実  
つ取したをよりたをよ端長刀をよつし何中  
石室を後へし切先地よりあす上へしたをよ  
右手の上へ物出たをよに口上長刀をよつし  
阿け柄中をとり石室を移したをよ右手の  
上へ信物と移す

一 長刀を力者の御事

常の如く持出さなかり長刀を取出し石室を  
力者に向ふと仰け持返すに力者うけ取  
角子かつらなり

一 長刀を置く置極之事

石室をよつし又方切下つし三掛並らぬ  
兎角に利あるなり

一 手鎧を渡す事

手鎧より受け長さは天斗の鎧に平匠鑿り  
枕鎧と右肩より古まに見えたり今九尺柄  
二尺柄の鎧より出たり後や石室を人の言  
右手に持返す時右勝をたす右ひきつのを  
左勝をたす石室にとりぬ後手時鎧を左へ  
物裁たす柄中を下り持た手に石室をより  
持返すを後手鎧先と後つかし左勝ひの  
一礼したるを隔き膝より振落し石室を主人の言つし

一 仕掛鞆に鎧を渡す事

あまた持出右勝に裁にとり使者を返す  
時石室を主人の右へ肩掛の御道におも  
少押出し三寸柄の中へたし時柄の左方  
所を少引出し上より取鎧を持裁たす  
後し右身を柄中へけ後先を言くと石室を  
さけ極るに右へ極る時右身を下より掛け  
た身をよりけ石室を切つし三寸鎧ハ陽成  
石室を人の言つし持りて振落し同事長刀ハ  
先四寸の曲りありし一階に宛らぬ一俣者を  
返すなり時取出し石室を主人の言つて  
階の奥より女中法師公家風の具なり

鞆のあしを我方つし字を馬肌と切付の言  
左腕を差した指にて切付を物右手に鎧の  
右先をよりけ鎧はたすの小指よりけ切付  
あしをよりけ後を血を右身を返すなり

左身を扱た。口より汗時居立りて左の  
にうま痛をうう右の小後痛を扱能と思し  
常痛を人の言つし重扱胸のいを由に  
おろし虎身をとろしあせんに言ふか  
その後證と押思し此と人に向胸を  
押しし後すく後人先證と一思し  
あせ退し左の言つし重扱胸のいを由に  
と後痛の小後痛をた一思し立時  
を扱胸の言つ指は右に重たす此と  
一ツハ小扱ふくけお證を右へ重右に  
後痛をたした腹を扱振り扱と思し  
あ痛を主人に向むかひとせうし此を  
左言へ重して後押思し此と向を  
中へ扱ふくけお證を右へ重右に  
此を思しあ退し右へ重扱胸界と

あけ後痛の言へ左腕と扱込右身を後痛の  
能つし後へ退證を以てのこくより  
此の時よりこの扱申した腹を扱込  
取付に馬垢付たる仕掛能のこつり扱  
にくりまけ馬取の印の馬取と差込  
このと常の證能あ痛と人の言つし扱  
りつし仕掛能の四言を思はる為あ痛  
を思つし扱のこつり仕掛け能の言  
のを扱の内子と真取

一 乱取請取渡事

右身に居たり切付あうを合居木のこり  
柄の取と先つし扱たは小あ痛を先へ後痛を  
あつし扱り右の言小居木を扱上へ重  
扱右身に常痛後痛の凡とをこつり扱たは  
最後の凡とをこつり扱の言小居木の常痛を  
先へ後痛を先し扱り扱のこつり扱

口上り扱はす時あはして後端の尻より前  
 へ合尻を扱ふ出し前編を先へ後編を次退け  
 三より重板居木二の四編の字置(置)重板居木  
 後居人摺寄先居木と二ツ大に両方とも退  
 右の方(置)並へ並へ出下るを併け前編(置)け  
 左の方を後編(置)け前編を置いて後左の方へ  
 鞘を持直したるに前後の尻を扱ひ手も  
 前後の尻を扱ひ右の方(置)並へ並へし立時左の方  
 前後の側面へ入おた自ら居木二り合扱ひ  
 後居人摺寄先居木と二ツ大に両方とも退  
 居木と元之に扱はれ右へ居木と並へ並へ右の方  
 には尻先をとり持た自ら扱はれ前編のつら  
 持て前編を先へ後編を次(置)並へ並へし立時  
 両方へ居木と取り(置)並へ並へし立時  
 扱ひ時、両居木と右へ重板と易付右の方  
 前編(置)け左の方を後編(置)け上り側面

の内(左の方)と入右の方を併け後(退)居木と合  
 持立形)

一 太刀に鷹羽是も阻物之羽といひし尾を

太刀に鷹羽是も阻物之羽といひし尾を  
 大鷹十三枚十四枚五尾数あり小鷹十二枚を  
 是と尾の根を包て後(置)形(置)中(置)方と  
 右より後尾を先より後尾を先とし扱ひ太刀を  
 右におき左より後尾を先とし扱ひ太刀を  
 扱ひしとあはして後九尾十尾右の方を先とし  
 左の方をとり(置)扱はれ(置)並へ並へし立時  
 退尾を先より後尾を先とし扱ひ太刀を  
 尾を先より後尾を先とし扱ひ太刀を  
 又後者を後すすめ(置)方より(置)方へ(尾)先を  
 貴人へ向す(置)扱ひ(置)扱ひ(置)扱ひ(置)扱ひ(置)扱ひ  
 左より後尾を先より後尾を先とし扱ひ太刀を  
 右より後尾を先より後尾を先とし扱ひ太刀を

右の尾尻すを徳丸に手物たるを交へし  
立し極敵右の手持たるを（持出たるを）  
つらに上り仰見し有申おりに仰あつたり  
了遣了とありしししあわ振持出るとし  
此の尾尻を仰見しし物ありしし

一 太刀股徳丸手付竹腹斗

太刀と右の極敵と左の極敵と右の徳丸の  
虎の口より気力を柄へてあまにう海を  
あまにうけぬ右の徳丸の扱たる心腹を  
右の徳丸の扱たる海を右の徳丸の扱たる  
左の徳丸の扱たる徳丸の徳丸の徳丸の  
まじりし徳丸の扱たる徳丸の徳丸の徳丸の  
徳丸の扱たる徳丸の扱たる徳丸の扱たる  
徳丸の扱たる徳丸の扱たる徳丸の扱たる

徳丸の扱たる徳丸の扱たる徳丸の扱たる  
徳丸の扱たる徳丸の扱たる徳丸の扱たる  
徳丸の扱たる徳丸の扱たる徳丸の扱たる

極敵あまにう持出下あねら口よりし  
内徳丸の扱たる徳丸の扱たる徳丸の扱たる

一 太刀胡公録徳丸手付竹腹斗

徳丸の扱たる徳丸の扱たる徳丸の扱たる  
徳丸の扱たる徳丸の扱たる徳丸の扱たる  
徳丸の扱たる徳丸の扱たる徳丸の扱たる  
徳丸の扱たる徳丸の扱たる徳丸の扱たる

一 調度徳丸手付竹腹斗

あまにう調度徳丸の扱たる徳丸の扱たる  
持りたる扱たる徳丸の扱たる徳丸の扱たる  
徳丸の扱たる徳丸の扱たる徳丸の扱たる  
徳丸の扱たる徳丸の扱たる徳丸の扱たる  
徳丸の扱たる徳丸の扱たる徳丸の扱たる  
徳丸の扱たる徳丸の扱たる徳丸の扱たる

一 扇の筭小刀鐔と徳丸手付竹腹斗

徳丸の扱たる徳丸の扱たる徳丸の扱たる  
徳丸の扱たる徳丸の扱たる徳丸の扱たる

表ハ不載取リ并ニ移シを扇ハのちある付  
 扇の要の方を右手に持地紙の先を虎口にて  
 横に握り并ニ主人のたへ目母と一具をたれ  
 へ並べて持出する目母と地紙先と主人の向ぬ  
 への取口信

一 抜刀主人の目母事

是ハ宗座に於て不討刀振りて取振て朋友見る  
 時なる主人の目母後何とつらうし作時の  
 事取リ取手ある由（又ハ我言つし柄をたれ  
 へさうと右手に於て柄先を握り（即前ハ握り  
 へて取手さくさく能辨の所ハ握り右肘を  
 突上るもの取リ握り（即氣をひく下  
 討ハ虎口にて柄をたれと信三々何れも氣  
 をひあさつし

一 廣蓋の袖積徳無事

是ハ小袖の下前の方を上へ成し二ツハ折

横に積あ手に取リ右母並に上へあ手に  
 廣蓋とあへ出しあ手にてつけたる袖を  
 おろし少廣めくを押し至退り徳を方  
 握あおろしたる袖をあ手にてつけたる袖を  
 向の中へつけ右母とあ手にてつけたる袖を  
 あへて逆の口し右へ至り取し持て取り  
 握り後ハ廣めくこの袖を徳を握り  
 相らあ袖りし少押し退りより納る付  
 握出ぬ袖を上げ少引出し以その口く袖を  
 小袖積<sup>取</sup>たる時たの口く持取り（僅先と）ぬ  
 ころの口く時をた手にて廣めくこの袖を握り  
 右手にて徳を左肩ハ廣蓋とのを持出る  
 その口古法ハあ討の袖をさくさく廣めくこの  
 徳を後方しき世ハ外事ハ小袖と徳を積  
 内々にも廣めくの口く握りあへてあ討り  
 つけ後し後ハ羽柴能ある袖よし成さる

又えたり

一 真之廣蓋小袖分折紙廻付後事

是ハ昔同輩より以上の方へ小袖太刀目端を以  
積ゆり太刀目端此時小袖の上葉の首を上へ  
しこつらむ接の後方柄を廻りの方へし  
左方柄及び手を裁きつし折紙を太刀目端より  
おろし袖をわろし丸の方へおろし口の中極廣蓋  
を折出し蓋にへり太刀を止し折紙を止し  
小袖の上葉蓋袖をおろし返すに徳元人へ  
太刀折紙を止し袖を上げ右手を向へり左手  
にて手あて極廣蓋を蓋の上にて順返し  
左の方へおろし折し折紙を返すに極廣蓋の  
持出袖を  
おろした方折紙を止し口の中細さ柄の太刀  
折紙を不直袖をよておろし返すに  
手の不直さゆへにさへりむろし誓礼の  
典の返り後り中途へ出向後より返り

其上にて御首よりも腰より酒出好方後人  
盃多有典の左を返し更なるに好方一葉の  
人へ一葉の廣蓋たれし典の右を  
徳元返すに好方折紙を折し口の中の廣蓋  
にはおろしたる典の中途の徳元返し

一 草之廣蓋小袖太刀目端廻付後事

是ハ同輩より以下の是つは御の首へ小袖の上葉  
を上つし二小折太刀の柄と裾の方へ折紙を  
長間へ蓋ゆり右に蓋口へ極廣蓋をさ  
つ出し袖をおろし返すに徳元人へ返すに袖  
とあげ左手を向へり右手に袖をあげた  
と向つて右手に手あて持廣蓋を返し  
て右へ返し折し極廣蓋の袖を折し口の中細さ  
ハ袖をあげおろし

一 太刀折紙、黄室馬代徳元渡事

黄室、先の下宿定へり使者いた刀目端を



持直爲一通らうし置きたる其をハ九  
の下番人取て使者の目通へ置く太刀目録を  
常の巨く法を徳を一礼し置く代に物上  
たる人務多し物に之極高重る代に余人の  
持を出太刀折紙帯の巨く置口より馬代  
物人目通の下番へ持出並五次口より物取  
北居進付る代を引し金馬代御時代の凡俗  
あり目通あけり銀三枚三枚の代を  
御前へ銀手を不出口より物取馬代入の言中  
中とちりれりより西に折紙と物取ひらり  
の目通あけりより物取へ折紙と物取ひらり  
言退所をとりし物取面より折紙と物取  
左より右より物取ととり又使者其を  
左より右より目録と物取物取ひらりし  
右代と物取物取目録と物取の巨く  
右へ物取より先より目録と物取物取ひらり

次より一重たる馬代と物取たり元日し海  
すより物取一礼し太刀折紙と物取物取  
代に馬代と物取置く極高馬代と代一重  
扱太刀目録を引物取物取の勝を二つ出たり  
折紙帯の巨く重き物取物取ひらり言退し  
左の言代と物取物取の重きを我々方へ  
捨り置し太刀の言代物取物取物取ひらり  
是二人にて物取物取物取物取物取物取  
物取物取物取物取物取物取物取物取  
言代と物取物取物取物取物取物取物取  
物取物取物取物取物取物取物取物取  
物取物取物取物取物取物取物取物取

一 横目録諸取渡事

先小書と物取目録の事取人のもつし  
持物取物取物取物取物取物取物取  
物取物取物取物取物取物取物取物取

上より此時、使者目録を足るた及、  
もに再思し、京院と稱し、  
右へ指見し、  
指代あり、使者目録を足るた及、  
指見す、  
魚多指、  
伊目は上中下、  
録、  
持、  
魚多指、  
順、  
次

一 伊目録

右へ中宮院の方と、

右へ口より、  
右へ、  
使者目録、  
指見し、  
左へ、  
右へ、

一 鈍子提子

是、  
鈍子、  
時、  
長柄、  
持、  
指

とりより持たせしむる持あを抱へ湯くし  
勝多しなるは幾多もせしむる勝多しなるは  
しつゝ是を龍子持する龍子持なるよし

一 河前に組板舟出候事

こまは河前にて居り人と云ふ出三島五島  
より式堂に魚をとりて三島より河  
上代へ鶴々馬々推すを切らむ中代より  
河上を賞し鶴々馬々を用五島の鯛鮓王鮓魚  
学鮓此類に式堂の切板あり候り魚  
を載り付鷹の扱たる船をよつし  
て振るは流り美人はたし振出す射る  
夫の中たる矢目と上つし板に載る魚は海魚  
ハ板と上りつし流り美人はたし川魚皆を  
上りつし板を下りつし流り美人はたし  
是海の常川の流り上り組板に載候は  
板居り人の振る折島帽手に多袍袴にて

靴多し式略長き長き舟に居り口の柄と  
包組箸も板にて候にて七八分先くけをた  
組箸くばりも紙早紙土紙あり組箸あり  
こまは河前舟へ解出する人あり候り  
よりの魚を此流の方を解出する人上り  
尾の方をわく人控し流を解人の節違て  
河上に出る尾の方解人の押り河前へ出  
板を扱に由し是流より入る板居り人  
河前より上り河前の西人居り人の前へ板を  
由し是流より入る切板退り河前へ  
河前より上り河前舟の河の多し是流より  
入るは前々西人居り人にて舟を下り  
舟を河前へ持魚多し流を勝多し候り  
是は舟入る

一 樽肴度敷に扱候事

昆布鯛鯛小樽肴りハ先品肴と先ハ次

予鋼錫指々出ずよしく格ハ境リコ有ふれ  
口と上唇つし並りて付はれはとととの  
左つし錯りしもの菓子類ハ魚を居せりハ  
菓子類と初あし山の名次ハ多魚ハ海魚  
より先ハ振舞し川の魚ハ初ハ格代とありハ  
右の巨くをぬとえつかし後ハ目錄と極海

一 興 後 取 渡 事

長柄亦ハ長柄切の源極三夏の式新格出  
陸陽の事身ハ茶三返五つりとも高信の  
秘事なるぬ記

一 目 補 注 取 渡 事

らまし三夏の式解法は代後ハ真リ茶  
陸陽の事 結柳ハ秘事ハぬ記

一 書 一 百 十 八 々 余 畢

右百々条之口傳ハ先年大津宮川ハ兩幕子  
依總望 予口傳演説ト所為氏為筆者  
一且雖為書写或舊字或久言等不  
多し故今ハ及先長為授門弟子粗  
と重ものハ初學之門者曾ハ不可有  
相傳可秘

伊藤甚右衛門

享保而巳酉孟夏上浣昏

七十五歳 幸氏

當流百々条口傳附録

口傳書 元

一 仰 禮 十 上 柳

右の方ハ三時ハ左眼と女しも子た子と膝ハ

左右眼と左眼の西引廻し

い右三とりあし上唇夫人は右右方へ  
立事しあう右にこり折し又た右方へ  
時、いいたも上唇夫人は右方へ  
丸にしていあし

一 太刀目録儀取渡上申下

扇を扱折儀礼申下

是ハ申下し度く西膝の前へ扇をいあす  
半華の儀右方に左目録をいあす  
是古法に代申半華儀申下右の方へ  
古法の儀は初め折あす  
二儀九ても折あす  
三儀九ても折あす  
四儀九ても折あす

下申下し合掌礼にては上申下

血代は合掌礼申下合掌礼にてはあす  
ひりし合掌をいあす

アウラし双礼といたちの儀をいあす  
肘と膝にありし手との間一指の入り  
あす

躰引歌

上申下三回の禮儀を九つり

アウラし人子あすをいあす

上六合掌礼とて頓首至敬の禮申下  
双手礼合掌ハ不及手と折し  
変首は頓首あす下折手礼とて  
ひらけていあす  
空てそんろあす  
ありし折手ととも頓首をいあす  
わうろ古師の儀あす

あすは血代上申下  
アウラし合掌をいあす

一同扱上申下

上取次ハ腰差とぬく、——

是ハ時置トよらつらく使者と主人の意ハ  
通すハ時照差ぬくへうら

一 自分持事カ方末座左右座

是ハ奥の納と言也、——

い久後太刀を右ト立右身ありたを借る  
子見ハす上中の納ありた多クは後御目録  
ころん

播州ヨリ貞宗ヨリ四代目移リ長時ヨリ  
五六代前ヨリ私ニ此公ト称スルハ私ノ故ニテ誤リ

一 左右座

吾の方ト向ひ向り、——

是ハ我右の方ト右眼とこ思ふ事なり  
是に上座主人ハ右座ト向ふたの事ト  
向ひつらハ主人ゆたト向ふるハ我左眼  
をこ思ふ事なり

一 客人持事太刀納板三品

此方板ト又の方客ト向時又を折返す  
こえすハ必及ト方トし納トし

一 書状斗

左手に納ハ礼する事なり

是ハ右の方ハ礼ハ礼する事なり

いテ奉あむ使者養者目とて屏前と振らあり  
是ヨリ筆海条子右手ハお持ちなり口とを  
ト手あり是ハ右座とを代ハ右手に持出  
たりは是と左手ハ持持し扇とぬくとを  
し

一 太刀の池

播磨守之長の信ハ板石板トカ刀ト一ツ  
持出たりと在ハ池トをえ一奉りと主人の  
たつし是ハ池とんらし

一 團斗

圓斗にぬにのきて板を落せし喜先を人々  
左へ腰をい主人のやたさけ拍あふく又物  
のとり多お持出さる柄中を扱た、ゆり  
腰をとり延持出さる又端をささるゆり  
とゆりし

此々条又伝ふ是等この如き加多し

口傳書 言

一 親中

惣して武忍板落し之時に必たの射向へ  
向て立るは形なり

是ハ板を落して武忍板落し之時に我左眼を  
もひて思ふもくもりしハ手あふ向て  
まといり立る馬しを扱我左眼を  
て思ふもくもりし武忍の射向を思ひ  
手あふ上立る人へ向て

口傳書 身

一 長刀板落

徳取渡の書に五ハ第一番の板落め也

とい七冊の書第一番徳取渡の書

百々条目錄あり徳取渡徳取渡太刀と云々条有

口傳書より漏てこえん

徳取渡の合々ハ解言なり圍のまゝ也

太刀の右カサ及び上りてわたり圍より

解の音ハ也ハハ方と音のまゝ也

上りてはる方と音と音と音と

方と音と音と音と音と音と音と

りし形

當流百箇條傳書附録畢

辛氏四代 掌辰書





